

2021 年 10 月 24 日（日）「倒錯的召しから恵みによる召しへ」

ガラテヤ 1:13-17

13 私がかつてユダヤ教徒としてどのように振る舞っていたかは、あなたがたが聞いているとおりです。私は神の教会を徹底的に迫害し、破壊しようとしていました。14 同世代の多くの同胞よりもユダヤ教に精進し、先祖の伝承に対しては極めて熱心でした。15-16 しかし、母の胎にいたときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされたとき、私は、人に相談することはせず、17 また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。

【序論】

今日はガラテヤ書の文脈上で「パウロの回心」の出来事を見てまいります。一口に「回心」と言いましても、ユダヤ教からキリスト教への回心というのは、全く異なる宗教からの回心とはだいぶ意味合いが違います。なぜなら、パウロが元々信じていた「ユダヤ教」はキリスト教の「元」あるいは「基礎」となっている教えであり、水源を同じくしているからです。

一例として、内村鑑三の回心というのは典型的な日本の宗教、「八百万の神」に対する熱心な宗教生活からの大転換でした。彼自身が回心前の自分について、次のように告白しています¹。

「無数の神社にはそれぞれの神が住し、その支配権の侵犯に心を配り、気に入らぬ行為をなす者はだれであれ、ただちに罰するものだとは私は信じるだけでなく信じこんでいました。私が最も崇敬した神は学問と書道の神であり、毎月二十五日には忠実に相応の潔斎^{けっさい}をして供物を捧げる儀式を行ないました。その像の前に額ずき、書道が上達しても覚えがよくなるようにと熱心に嘆願したのであります。《中略》あまりにも多くの神々を満足させ、なだめようとして、私はいつの間にか落ち着きのない内気な子供になってしまいました。」

内村のキリスト教との出会いは、ある友人に誘われて礼拝を見物するところから始まりました。周りの仲間たちが次々と入信していくなかであって、彼は「全身をあげてその道に進むことに抵抗した」と言います。

¹ 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波文庫

「祖国の神々と異なる神に忠誠を誓う道は、たとえ死ぬ目にあわされてもできないと思いました。外国に由来する信仰に入れば、我が国の裏切り者となり我が国の宗教の背教者となるのです。」

実は、内村は先輩の働きかけによって半ば強制的に「キリスト者」とされてしまったのですが、その時の誓約内容に明記されている「ただ一人の神を信ず」という信条によって、彼は「すれ違うすべての神々に頭を垂れなくてはならない」という一種の「律法」から解放されたのでした。

「新しい信仰の実利はただちに私に明らかになりました。全力をあげて入信に抵抗していたころから、すでに私はそれを感じはじめていました。宇宙にはただ一つのカミしかなく、私がそれまで信じていたような多くの——八百万を越す——神はないことを教えられたのであります。キリスト教の唯一神信仰が、私の迷信の根を、すっかり断ち切ることになりました。私のなしたすべての誓いと、怒りっぽい神々をなだめるために試みたさまざまな礼拝形式とは、このただ一つのカミを認めた結果、いまや無用になりました。」

内村の回心は全くの異教世界からの転換でありましたが、パウロのそれは違います。キリスト教の信仰はユダヤ教と同じく旧約聖書に基づくものでありながら、その解釈はパウロにとって「とんでもない異端」と見え、彼はその根絶を図ったのです。彼はキリスト教徒を迫害することこそ「神からの召し」だと信じて疑いませんでした。しかし、一つの出来事を通して、彼の人生は真逆の方向へと転換したのです。彼の回心はひとえに「聖書解釈の転換」と言うことができるでしょう。

【本論】

今日の箇所を「召し」というキーワードを中心に見ていきたいと思います。

- ①ユダヤ教時代の倒錯的「召し」
- ②ふさわしくない者への召し
- ③受け売りではない使徒職への召し

本論 1. ユダヤ教時代の倒錯的「召し」

私がかつてユダヤ教徒としてどのように振る舞っていたかは、あなたがたが聞いているとおりです。私は神の教会を徹底的に迫害し、破壊しようとしていました。(1:13)

パウロはユダヤ教時代にはユダヤ名である「サウロ」を名乗って（呼ばれて）いましたが（使徒 8-9 章）、イエスの弟子となつてからはギリシャ名である「パウロ」を名乗るようになります。この意図的な呼称の変更は、彼の回心を象徴するものと言えるでしょう。改めて、ユダヤ教時代の彼の熱意にふれておきたいと思います。

さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺害しようと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。（使徒 9:1-2）

「**ダマスコの諸会堂**」というのはユダヤ教のシナゴグを意味します。彼がこの時にやろうとしていたことは、キリスト教徒の迫害をユダヤ当局公認とすることでした。そのような法律ができてしまいますと、もはやキリスト教徒に逃げ場はありません。どのような法的手続きが取られる予定だったのかは分かりませんが、おそらく冒瀆罪（石打刑）が適用される方針が立てられようとしていたのでしょう。

パウロが当時の自分の活動を振り返って語っている内容を丁寧に見てみましょう。「迫害した（ἐδίωκον）」「破壊した（ἐπόρθουν）」という二つの動詞が使われていますが、いずれも未完形であるところから、彼が継続的に（しつこく）この活動に従事していたことが窺われます。想像するところ、キリスト教会で日曜日に礼拝がささげられているところに憲兵隊員のごとく乗り込み、問答無用で連行して行ったのでしょう。安心して礼拝できたものではありません。その目的は、この「新しい思想」「異端的教え」を撲滅することでした。旧約聖書の律法をないがしろにするような教え（と認識していた）は排除しなければならないと考えたのです。彼は自分のやっていることは「神からの召し」だと信じて疑いませんでした。私はこれを「倒錯的召し」と呼ぶことにしました。誰しも「分からないでやっていた過ち」ということが人生の節々にあるのではないのでしょうか。過去の自分を振り返り、「どうしてあんなことをしてしまったのだ」と頭を抱えることは少なくありません。パウロにとって、この「倒錯」は半端なものではなかった。彼はまさしく「神に仕えている」という信念によって、その神を迫害していたのです。「**神の教会**」という表現（単数形）が敢えて使われていることから、諸教会の迫害は総括して一つの「神のエクレシア」「キリストのからだ」への攻撃であったことが表されています。

同世代の多くの同胞よりもユダヤ教に精進し、先祖の伝承に対しては極めて熱心でした。

(1:14)

本訳で「**精進**」という仏教用語が採用されたことに少々驚きましたが、「戒律を守る」「禁忌を避ける」「信仰に励む」といったユダヤ教にも通ずる精神を表すのに便利だったのでしょう。サウロは旧約律法そのものはもちろん、その律法を生活の実情に合わせ

て適用できるようにした「解釈」、口伝伝承（ハラカー）にも精通し、それを自ら遵守し民衆に教えていました。彼がこの時代の自分について振り返って語るとき、そこにはある種の「誇り」のようなものさえ感じられます。彼は生半可な気持ちで神に仕えていたのではなかった。誰にも責められる余地がないほどに戒律を遵守し、金銭的な不正もなく、施しにも熱心だったのでしょう。自分の生き方が神に喜ばれないはずはないと言い切れるほどに、非の打ち所のない生き方をしていたのです。しかし、その生き方の極致が「神の教会」を迫害することであったというのは、皮肉です。これが「律法」の行き着く所であった。

本論 2. ふさわしくない者への召し

しかし、母の胎にいたときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされたとき、(1:15-16) 神を愛していたはずが他ならぬ神を迫害するという「倒錯」に陥っていたサウロを、神はその「滅びの道」から贖い出してくださいました。教会の主であるイエスご自身が彼に直接現れてくださったのです。

ところが、旅の途中、ダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」と語りかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「私は、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが告げられる。」(使徒 9:3-6)

パウロは、自分の救いは「たまたま」起きたことではなく、神のご計画に基づくものであったと認識しています。「母の胎にいたときから」という表現は「永遠のご計画」の別の言い方であると思われますが、これは預言者が働きに召されるときに用いられることがありました(イザヤ 49:1、エレミヤ 1:5)。パウロの救いは使徒職への召しと表裏一体であった。彼は他の弟子たちとは違い、救われた瞬間に異邦人への使徒として召されているのです。彼の救いの目的は異邦人への宣教者となることであったと言っても過言ではない。彼でなくてはできない働きだったのです。なぜなら、異邦人というのは「本来恵みを受けるに値しない民」でありましたから、そのような民でも救われるための前例が必要だったのです。パウロのような迫害者さえも救われたということが重要であった。彼ほど救われるにふさわしくない人間はいなかったにも拘らず、神は彼に恵みを注いでくださったのです。パウロの救いは、どんな罪人でも救われうることが証明された出来事でありました。

本論 3. 受け売りではない使徒職への召し

私は、人に相談することはせず、また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。

(1:16f-17)

ここでは、救われた後、彼がどのように行動したかが記されています。その書き方は至極慎重です。まず「人（原文では「血肉」）に相談することはせず」と言われていますが、これは彼が誰か人間の言葉に聞き従って行動したのではないことを強調する表現です。「エルサレムへ上ることもせず」とは、自分の教えがエルサレム教会の指示によって出てきているものではないことを表しています。エルサレム教会は「総本山」のようなイメージが持たれていたか。むしろ、パウロは自分の教えはキリストから直接受けたものであるとこにこだわります。「アラビアに出て行き」と聞くと、彼が砂漠で過ごしたかのように読めてしまうかもしれませんが、むしろダマスコ東南方のナバテヤ王国の北部へ移動したことを示唆します（Ⅱコリント 11:32）。なぜこんなことが書かれているかというと、それは早速アラビアにおいてキリスト教の伝道を始めたということを言おうとしているのでしょう。つまり、パウロはエルサレム教会から派遣されたのではなく、キリストご自身の指示に従った。しかし、アラビア伝道については使徒言行録に記録がないところを見ると、その伝道はあまり実りがなかったのでしょう。

ここでパウロが特に読者に伝えたいことは、彼を使徒として召してくださったのはキリストであり、それゆえに彼が語っている福音はキリストの御心であるということです。彼を「使徒」と認めるということは、彼を召してくださったキリストを認めることとつながっているのです。

ガラテヤ教会の人々が耳を傾けなくてはならない一つのメッセージがありました。それは、彼らが向かっている道とは、かつてパウロが進んでいた「滅びの道」であるということです。ガラテヤ教会の人々は「ユダヤ教徒」になろうとしていたのです。戒律を遵守する道、業によって義と認められようとする道です。パウロはよく知っていました。その道は神を迫害するところに通じていると。

最初に取り上げた内村鑑三の証も、違うようで共通する面があります。彼は八百万の神一人びとりに対して忠実であろうとした結果、常にビクビクしていなければならない生き方に不自由さを覚えていました。しかし、礼拝すべきはただ一人の神でよいということを知った結果、その心は解放されたのでした。救われた後の彼の生活の変化が赤裸々に記されています。

「カミは一つであり多数でないことは、私の小さな魂にとり文字どおり喜ばしきおとずれでありました。もはや東西南北の方位にいる四方の神々に、毎朝長い祈りを捧げる必要はなくなりました。道を通り過ぎるたびに出あう神社に長い祈りをくり返すことも、もう要らなくなりました。今日はこの神の日、明日はあの神の日として、それぞれ特別の誓いと断ち物とを守らなくてもよくなりました。頭をまっすぐに立て晴れやかな心で、私はどんなに昂然と次々と神社の前を通り過ぎて行ったことでしょう。私を支え見守る神々のなかのカミを見出しのですから、もはや祈りを唱えなくても罰のあたることはないのだ、との確信に充ちていたのでありました。」

【結論】

ガラテヤ書の中心テーマは「自由」です。キリスト者は自由を得た存在である。律法の諸々の戒律から自由にされたパウロは、異邦人にもそれを宣べ伝えていました。しかし、人間は再び自分で縄目を作って縛られていく人生を構築する危険性を持っています。福音だけを聞いていればよかったのに、誰かの助言によって心が揺るがされ、それが自分の何らかの劣等感にふれることによって、その問題を自分の力でどうにか処理していこうとする傾向がある。私たちはただ恵みによって救われ、決して棄てることをなさない神との契約関係に入りました。この原点に常に立ち続けたいと思うのです。私たちの生き方はキリストが与えてくださった自由に満たされているかどうか、今一度自己吟味をしてみたいと思います。

【祈り】

罪人を憐れみに義としてくださるイエス・キリストの父なる神様。主の十字架において、あなたの恵みは現れました。その所で、私たちの罪は完全に裁かれました。私たちはその真理に立ち続けなければよいのです。しかし、気づけば「別の声」に耳を傾け、主の恵みの効力を疑い、自ら「義を立てる」行為へと進んでいく傾向のある私たちです。その「倒錯」にいち早く気づかせ、主の許に立ち返らせてください。一度いただいた自由を手放すことのないよう、お守りください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

倒錯的熱心をもって仕えようとする者に、真理の道を示し給う、父なる神の愛、
ふさわしくない、どんな罪人にも、ご自身の義を差し出し給う、主イエス・キリストの
恵み、

救いと同時に、各々の賜物に応じた召しを与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。